

東

Azuma
Naomi

直己

文庫書下ろし長編ハードボイルド



古

ふるきず

傷

KOBUNSHA



光文社文庫

文庫書下ろし／長編ハードボイルド

ふる
古

きず
傷

著者 東 直 己

あづま

なお

み

2004年11月20日 初版1刷発行

発行者 篠 原 睦 子
印刷 慶 昌 堂 印 刷
製本 ナ シ ョ ナ ル 製 本

発行所 株式会社 光 文 社

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6

電話 (03)5395-8149 編集部

8114 販売部

8125 業務部

振替 00160-3-115347

© Naomi Azuma 2004

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN4-334-73776-5 Printed in Japan

☐本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

光文社文庫

文庫書下ろし／長編ハードボイルド

古 傷

あづま 東 なおみ 直己



光 文 社

この作品は光文社文庫のために書下ろされました。

古 傷

解説

香山^{かやま}二三^{ふみ}郎^{ろう}

JR薪谷駅まさやの裏、数階建ての低いビルがゴミゴミと建て込んだ中に、邑田ビルむらたという六階建てのビルがあつて、その五階に、法間謙一のりまけんいちが社長を務める「法間探偵社」の事務所がある。この事務所で働いている人間は、社長の法間以外にはひとりもない。……いや、社長の法間すらが、今は働いてはいなかった。窓からぼんやりと外を眺めている。

ゆつたりと空を飛ぶ、鳩を眺めているのだ。

ほかに、することがないからだ。

鳩は、楽でいいなあ、と思つている。

そりやまあ、生存の適地を争奪して、食べ物も確保して、生きて行くのは楽ではないだろう。弱者は淘汰とうたされるのかもしれない。だがとにかく、鳩は、毎月の支払いに追われることはない。これだけでも、相当楽なはずだ。……いいなあ……

とりあえず、今月分の支払いは、一通り済ませた。慌ただしくあれこれと歩き回り、

渾身の弁解や言い訳を繰り返し、ありとあらゆる秘術を尽くして金策に奔走し、どうかこうにか乗り越えて、普通預金口座残高は、マイナス三十五万数千円。四十万円少々の定期預金があるので、ここまでマイナスになることができたが、つまり、残っている現金は、今のところ、数千円、ということになる。

（いや……数千円の現金が残っている、という、この言い方で正しいのかな？ それとも、引き出し可能残高、というのは、要するに定期預金を担保にする借金だから、残金数千円、というよりも、借金の限度枠が数千円残っている、と言うべきなのかな？）

なんだかわからないが、とにかく、今年で四十八の大人の、「社長」と自称する……いや……自称したことはないな。自分から、「私が社長の法間です」と名乗ることはない。……だがとにかく、「社長」と他称される……いや、誰も私のことは「社長」とは呼ばないか。法間、と呼び捨てか、あるいはホウカン、とアダ名で呼ぶだけだ。……だから、つまり……とにかく、「社長」と名刺に刷っている、一人前の五十に手が届く男が、現状で自由になる金が、数千円だ、というこの現実。

（いやあ……世の中つてのは、実際、面白いなあ……）

と、法間は案外平気だ。気楽な独身生活でもあり、月に五万円もあれば生きていける、

とタカを括くくっている。だが、同時にまた人生の修羅場をいくつかは踏んで来ているので、そうやってずっとタカを括くくっていると、そのうちに、首を括くくる羽目おちいに陥おちいるであろう、ということもわかつている。

（何か仕事を見つけないかなあ……）

今のところ、最後の現金収入は、先月の中頃の十五万円だ。依頼人は、某大手カーディーラー薪谷支店の支店長。息子が出会い系サイトで「出会って」「イイ思いをした」相手の女の夫から、「おれの女房に何をしたんだてめえは。慰謝料五千万払え」と脅迫されている、なんとかしてくれ、と泣きついてきたのだ。カーディーラーの支店長であるくせに、社会の仕組みになぜか疎くて、これ全体が、よくある美人局詐欺つつもたせだ、「出会った」と思い込んでいるのは「買のエサに食い付いた」ということであり、「イイ思いをした」というのは、すっかり罠にはまったのだ、ということがなかなか理解できないでいた。で、キレイに処理してくれたら、三十万円払う、と言うのだ。いささかしみつたれた話だな、とは思ったが、法間は、あまり仕事は選ばない。「なんとかしましょう」と引き受けた。

とにかく、この支店長の息子はバカで、女に言われるままにケータイのカメラで「ハ

メ撮り」して、それをメールで送ったりした（のみならず、いろいろと恥ずかしいことを書き綴ったメールも一緒に送ってしまった）（ex…この時のキミは、とてもどうのこのので、ボクはつつい、どうのこのしちやったヨ（*、△、*）……）ために、公表されては困る証拠が歴然と残っていたりして、状況は最悪だ、と支店長は思ったらしい。人間の中には、不思議なことに、こういうことは犯罪であって、こういう連中を取り締まるために警察があるのだ、その警察を維持するためのコストは、自分が負担しているのだ、という基本的な事実を忘れてしまう者がいる。

まあ、そういう人々がいて、そういう隙間すきまがあるから、法間が生き延びることができ
るわけだ。引き受けた法間は、相手の男と女はおそらくはグルであって、しかも常習であ
ろう、と判断し、電話とメールのやり取りで、相手方の男と直接会うことにした。

で、直接会えば、もう、法間の独壇場である。法間のことを、「ノリマ」と正しく呼
ぶ人間はあまりいない。たいがいの知り合いは、「ホウカン」と呼ぶ。つまり「幫間」、
太鼓持ちとアダ名される法間は、自らが最も得意とする、お世辞オダテ阿諛追従あゆついしやうを怒
濤とうの如くに浴びせかけた。その結果、相手は十五分も保たずにあっけなく陥落し、つい
ついに、自慢話の中で、自分の住所だの身元だのをポロリと漏らしてしまったのだ。

あとは簡単な話で、その半日後には、法間から通報を受けた薪谷中央署刑事二課の捜査員がふたり、その居住地（要するに、住んでいる木造モルタルアパートの一室だが）に於いて、共犯の女とともに身柄を確保、任意同行の上、七時間後に薪谷署内で逮捕した。また、余罪七件が明らかになり、そのほかに、居住地にあったOA機器や、これからアプローチしようとしていたらしい、男たちのデータ数十件を記録したフロッピーなどを押収して、とりあえず決着した。

これで三十万円、と思ったのだが、こうなると依頼人というのはがめついもので、「あんなことなら、私にだってできた。あんたは警察に通報しただけじゃないか」という理屈が登場し、支店長は、「半額しか払わない」と言い出して、十五万円しか払わなかったのだ。

こういう時、法間は弱い。

（あんまりだ）

と怒りは感じはするものの、どうしても本気で怒ることができない。苦笑いで、首を振る程度で、それ以上「断固たる処置」を取れない。

かと言って、得意技のお世辞オダテ阿諛追従を駆使して、約束通りの金を吐き出させ

る方向に持っていこう、という気持ちにもなれない。やればできる、不可能ではないだろうが、「そんなあく〜にしてえ〜までえ〜」と、昔のフォークソング、「若者たち」の一節が聞こえて来てしまうのだ。

もちろん、新聞や地元メディアにこの事実を漏らして、支店長に恥をかかせる、ということとは不可能ではないが、実際には、できることではない。そんなことをすれば、以降、法間はクライアントから見放され、完全に仕事を失ってしまう。

気が弱い私立探偵というのは、世界で最も立場が弱い存在じゃないかしら、と法間は静かに諦めている。

その結果、結局のところ、十五万あれば今月の支払いにはなんとか足りるし（基本的に、生活はつましいのだ）、実働はせいぜい五日程度だったから、つまりは日給三万円、という計算になるし、……大した稼ぎではないが、そんなに悪くもないさ。と無理矢理納得してしまうのである。

（だもんだから、私はいつまでも貧乏なんだろうなあ……）
とは思うものの、

（でもま、飢え死にしないで済んでいるんだから……）

まことに、人生、下を見れば切りがない。

その時、電話が鳴った。いま時、わりと珍しい、というか希有な黒電話である。

「はい、もしもし。法間探偵社です」

「よう。ホウカン」

特徴のあるかすれ声で、『薪谷タイムス』の広告部長、折部おりべだ、ということがすぐにわかった。この新聞は、薪谷市を中心に北関東エリアでは結構影響力のある新聞だ。地方紙ではあるが、この地域では、「朝毎讀」を圧倒する部数を誇っている。

「あらま！ これは風雲児！」

「あ？」

「北関東の風雲児、ここにあり！ いやあ、参るなあ。北関東の広告業界をひとりで背負って立つ、男の中の男、折部部長その人が、またなんで私如きに直に御電話など。いやもう、まったくもって、忝かたじけない！ で、なんで御座居ございますか、御用件は。不肖私、法間謙一、部長のためなら、たとえば火の中水の中！」

「……相変わらずだなあ……」

溜息まじりで呟く折部に、法間は決然と答えた。

「もちろん！　で！　御座居ますとも！　私はもう、生まれる前から、死んだ後まで、相、変わりませずに、部長にお仕えする所存で御座居ますから！」

「ところで……」

折部は軽く聞き流して、用件に入った。法間の土砂崩れのような阿諛追従は聞き飽きた、という感じである。

「今は、忙しいのか？」

「な！　……なにを！　……なにをおっしゃいます！　そんな、天下の薪谷タイムスの折部部長ともあろうお方が！　私如き虫ケラに、『忙しいのか？』などと！　御身分に関わりますよ！　いけません、そんなことをしてはいけません。私如きの忙しさ、都合など、折部部長の御大切な御用件の前では、なにほどのこともございません。吹けば飛ぶようなもので御座居ますから。もう、そういう時は、いやだなあ、御存知じやありませんか。私如きの都合など全く無視してくださいよ。ただもう、『法間、何時にちよつと来い』と、そのように、お命じ下さい。もう、それで充分。不肖私、たとえそれを受けたのが、携帯電話で、居場所がパリであったと致しましても、勇躍敢然として、間、髪を入れずに瞬時にして帰国、欣然即座に御前に罷り出ます所存で……」

「あんた、この頃加速度がついてないか？」

「はあ……時折、暴走する場合が御座居まして。まあ、生活困窮の挙げ句、と申しましようか」

「わかった」

なぜか折部は、今の一言で、「捕まった」と自覚した。うかうかと引つかかった。もう、逃げられない。

「とにかく、これから、すぐにでも参上致しますで御座居ます！」

「……そうしてくれたら、助かる」

ついそう言ってしまった。その声には、微かに、疲労の雰囲気がかす漂っている。

「もちろん！ で！ 御座居ますとも！」

「それじゃ、これから来てくれ。仕事の話だ」

「はい！ 畏まりました御座居ます！ 五分で参上致しますです！」

*

折部は溜息をついて受話器を置いた。電話をかけた時は、発注するとは決めていなかった。法間の都合を聞いて、ほかにあれこれ当たってみよう、と考えていた。それな

のに、受話器を置いてみると、すでに自分は法間に仕事を発注したも同然だった。

「おれとしたことが……」

折部はしみじみ呟いた。

顔を上げ、目の前に広がる広告局広告部の部員たちのデスクを眺める。部員のうち半分は、得意先や代理店に、版下を見せに行っているのだろう、外出している。……もちろん、サボっている者もいるのだろうが、営業部員というのは、数字を上げている限りは、どんなにサボってもいい、と折部は考えている。

残っている部員たちもそれぞれ忙しそうに仕事をしている。以前のように、あちこちでワイワイと電話をしている、という光景は見られなくなったが、その代わり、部員たちは皆、それぞれのパソコンに向かって、それぞれの業務をこなしている。

改めて、しみじみ部員たちを眺めると、いささかの感慨はある。

ついつい、自分の来し方などが思い出されたりするのだ。

(……歳だな)

就職活動の時期、マスメディアというものに憧れて、新聞・出版・電波など、メディア業界のあらゆる企業を片っ端から受けた。ほとんど落ちて、なんとか潜り込んだ地方

新聞『薪谷タイムス』で、最初に営業部に配置された。それまで、折部の頭の中には、報道とか編集とか制作とか、そういう言葉しか存在しなかった。メディアで活躍する、ということとは、ストレートに報道であり、百歩譲って制作であつた。当然、経理だの営業だの総務だの、そんなものは全く存在しなかった。だから、新聞社の営業部、つまり広告取りか、と初めは落胆し、自嘲したが、そのうちに、自分たちの働きがなければ『薪谷タイムス』は存在できないし、機能もしない、ということに気付き、そこでいきなりやる気が出て、以来ほぼ三十年間、営業一筋で生きて来た。その人生には、いささかの自負もある。

カラオケの時、ご機嫌で歌うのは、もちろん「マイ・ウェイ」だ。

「リグレット。アイ・ハヴァア・フュ〜……」

と切なく歌い上げる時、そして

「ア〜イ・ディディタップ！」

と決然と言い切り、そして

「エヴリ・ハ〜イ・ウェ〜イ」

と滑らかに、しかし雄々しく続ける時、折部の頭の中では、エンドルフィンの蛇口が